

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(データ送信)

【氏名】西田紘子

【所属】(助成決定時) 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校
(現在) 九州大学芸術工学研究院

【研究題目】近代以降のドイツ語圏における音楽作品の解釈の系譜——ハインリヒ・シェンカーを中心に

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、19世紀後半から20世紀前半のドイツ語圏において、ドイツの「偉大な」作曲家の作品に対してどのような解釈がなされてきたかの系譜を明らかにすることを目的とする。

ドイツ語圏の音楽著述家たちは、自らの作品論の正当性を得るために、前代や同時代の音楽著述家の作品論を批判してきた。その典型的な例が、ウィーンのハインリヒ・シェンカー(1868~1935)であり、シェンカーは多くの著述家たちと論争を行なっている。こうした「論争」は、音楽作品論をめぐる知のネットワークを読み解く際の鍵となる、一種の文化として捉えられるべきである。論争の背後にある見えざる関係をあぶり出すことで、当時の思想風潮や文化的価値観および当時の人間関係の新たな側面が開けてくると考えられるからである。こうした前提のうえで、本研究ではシェンカーの作品論と、フリッツ・イエーデをはじめとするドイツで活動した音楽家による作品論を採り上げる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

まず、1920年代ドイツ語圏におけるJ.S. バッハの作品に対する様々なアプローチを比較検討した。フリッツ・イエーデの『バッハの芸術』(1926)、ハインリヒ・シェンカーの『バッハの作品論』(1921-1924, 1925, 1926, 1930)における作品解釈の特徴を明らかにし、シェンカーによるイエーデ批判を土台にしなが、両アプローチの類似点や相違点を明らかにした。ドイツ語圏における1920年代のJ.S. バッハの作品論や有機体的音楽作品論に関しては、とりわけヒンリクセンの論考が本研究の土台として重要である(Hinrichsen 2000)。

また、この時代の作品論に関係する一次資料を収集するため、ウィーン等において現地調査を行なった。同時に、思想史研究の基礎文献を揃えて学際的な知識を得るよう努め、音楽学の分野においても地域や時代を問わず類似研究を読み込むことで知見を深めた。

以下の3つの研究発表を行なった。1. 2011年7月に開催された日本音楽学会西日本支部の例会において「フリッツ・イエーデによるJ.S. バッハの《インヴェンション》解釈——エネルギー学派の語彙と図示をめぐって」、2. 2011年9月にソウル大学で開催された“CURRENT MUSICOLOGICAL SCENE IN EAST ASIA: Celebrating the Foundation of East Asian Regional Association of The International Musicological Society”において“Instructioning how to interpret Beethoven’s last Piano Sonatas around the turn of the 20th century”, 3. 同月にローマで開かれた“VII European Music Analysis Conference”において“Heinrich Schenker’s verbal associative narrative and Urlinie narrative”という研究発表である。いずれの発表においても有意義な助言を得ることができた。

【結論・考察】(400字程度)

日本ではあまり知られていないハインリヒ・シェンカーの音楽思想の歴史的意義が喚起されると同時に、同時代人や前代の思想家との関連から当時の思想風潮の一端を明らかにすることができた。これまで、政治的・社会的な事情からシェンカー自身の思想面に光が当たることは少なかったがゆえに、本研究が日本の音楽学界ならびに思想研究にもたらす意義は決して小さくないだろう。とりわけシェンカーという音楽家の

名は、アメリカやヨーロッパで知られているのに対し、日本では世紀末ウィーンへの関心が大きいにもかかわらず、その実態は一部の有名な人物へのまなざしに限られているともいえる。したがって、個々の事象を結びつけ、思想図を詳細に描き出していく作業は、音楽理論、音楽美学、音楽思想史研究の喫緊の課題であると思われるので、今後も続けていかなければならない。

また、今後は音楽学の分野内部にとどまらず、分野横断的な研究をさまざまな場で発表していき、シェンカーをはじめとするドイツ語圏の音楽著述家たちの作品論を、広く思想史の文脈に位置づけていくことが求められる。